Musa 博物館学芸員課程年報　第 35 号
pp.13 ～ 17　2021 年 3 月

博物館実習における自校教育の取り組み
―2018 年度～ 2020 年度の学院志研究室活動報告―

小倉 久美子 *

要　旨

学院志研究室は学院の歴史や学院関係者の事績を調査し、ゆかりの資料を収集・整理・保管することを日々の業務としているが、2018年度から博物館実習の一環でそれらの資料をつかった学内実習に取り組んでいる。学芸員としての知識・技術の修得のみならず、学院の歴史的資料に触れる機会をつくることで自校に対する理解を深める工夫を行なった。

キーワード

博物館実習　自校教育　学院志　大阪府北部地震　新型コロナウイルス

はじめに

本稿では、2018 年度から 2020 年度にかけて学院志研究室で受け入れを行なった博物館実習の内容について報告する。学院志研究室については別稿[1]で沿革をまとめていることから、ここでは改めて述べず、まずは博物館実習受け入れに至る経緯に触れておきたい。

1．博物館実習の受け入れに至るまで

学院志研究室では 2015年度から記念資料室、2016年度から将軍山会館地下倉庫に収められた資料の整理および目録作成に着手してきた。記念資料室は大学創立20周年を記念して 1982年に設置された一室だが、専属の担当者が配置されない期間が長かったためほぼ物置状態であった。将軍山会館は学院創立120周年記念事業および大学創立40周年記念事業として 2008年に建てられた教育施設だが、開館にあたって寄贈された品々や過去の展示物などが無造作に収まっている状態にあった。それらに分類番号を付け、目録を作成し、劣化の激しい貴重資料についてはデジタル変換を行なうなどの事業をすすめ、2018年度にはある程度の目途が立つ状態に至った。

こうした活動の過程での楽しみは、戦前にまでさかのぼる古い資料や、学校の歴史において極めて貴重といえる資料と出会ったときである。資料の発掘といえば大げさだが、倉庫の片隅で忘れ去られていたモノに出会い、その価値を汲み取ることができたとき、ひときわ大きな感動が湧く。これを教育へと還元することはできないだろうか、という思いが博物館実習受け入れの背景にあった。

一方で、将軍山会館の展示物の劣化が学内の一部で問題視されていた時期でもあった。将軍山会館には４つの学校史展示室があり、学院の源流と理念の継承、学生生活、活躍する卒業生等の紹介をしている。大学同窓会組織である大学校友会からの基金をもって建設された経緯から、総務課が施設管理を行なっているが、開館から10年を経てもなお開館当初から同じ展示物がそのまま展示ケースに入れられている状態にあり、劣化による損傷が見受けられた。2017年度に筆者が着任してから、しばしば資料の応急処置を総務課から依頼され、出来る限りの手当てをしてきたが、2018年６月18日（月）に大阪北部を震源とする地震が発生した。震源地に近かった本学の校舎も被災に見舞われた。将軍山会館もそのひとつである。このために、学院志研究室室長の将軍山会館館長兼任が規程で定められ、同年７月から学院志研究室が将軍山会館の展示企画を一任されることとなった。

折しも、2018年４月から博物館研究室の瀧端真理子先生（心理学部）を学院志研究室室員としてお迎えしてい

* 追手門学院大学学院志研究室

たことが幸いし、博物館実習受け入れの条件がそろったのである。

その後、将軍山会館において大規模な常設展示替えを行ない、同年９月にリニューアルオープンと同時に、企画展として将軍山会館開館10周年記念「将軍山会館10年のあゆみ」を開催した。ここで劣化の激しい資料をすべて撤収し、かねてより学院志研究室で整理保管してきた所蔵資料のなかから展示に見合うものを厳選し展示した。加えて、博物館実習による実習場所としての活用もこのときから開始した。

２．2018 年度の博物館実習

学院志研究室にとって初めての博物館実習は2018年９月13日（木）の１日だけの受け入れであった。実習生は８名で、４号館１階の学院志研究室資料室と将軍山会館とをその実習場所とした。まずは資料室において学院志研究室の活動概要を話し、いくつか学生の興味をひきそうな資料を見せながら学院の歴史を紹介した。つぎに将軍山会館へ移動し､展示室の解説を加えながら一巡り、ひとつの空のショーケースに案内した。その大きさは幅90㎝×高さ91.6㎝×奥行45㎝。今回の展示実習で使うものであることを説明し、よく観察してもらった。再び資料室へ戻り、具体的な展示実習にはいった。

このとき、展示実習で扱う展示物はあらかじめ学院志研究室が指定した。それは大学構内の真龍寺山一号墳の出土遺物である。本学の周囲には古墳時代前期から後期にかけての古墳が多数残されている。大学構内にも真龍寺山一号墳と将軍山第一地点遺跡（月見山古墳）の２つの古墳が残されている。こうした立地もあってか、本学では大学開学の２年後にあたる 1968年５月に考古学研究会が発足し、当時の文学部東洋史学科資料室で活動が開始された。やがて同好会、部へと昇格するなかで、真龍寺山一号墳の発掘調査が行なわれ、『真龍寺山一号墳―調査報告―』が1970年に上梓されたのである。このときの発掘調査で出土した遺物を今回の博物館実習で活用したわけである。

写真＝2018年度博物館実習展示（将軍山会館）

2018年は考古学研究会が50周年を迎える節目の年であった。このタイミングで考古学研究会の功績を紹介する展示を在学生の手でできた意義はあったと思う。

将軍山会館は、「本学の歴史・資料について展示するとともに、卒業生・在学生・教職員の親睦を図ること、本学の発展に寄与することを目的とする。」と規程に定められている。博物館実習の展示においてもこの範囲を超えることはできない。実際のところ授業中にどこまで伝わったか心もとないが、展示実習を通じて本学の歴史に触れ、先輩たちの想いや努力を感じ取ってもらうことに博物館実習を学院志研究室で受け入れる意味があると考える(2)。

2018年度博物館実習の反省点としては、事前の下調べや古墳の実見をする時間が確保できなかったことがあげられる。真龍寺山一号墳は 2015年に整備を終え一般に公開されているが、大学構内にありながら訪れた学生は極めて少ない。展示ケースを１つ完成させたとき、実習生から自然と拍手が起こった。展示品についてより深く知っていれば、その感動はさらに大きなものになったことだろう。

３．2019年度の博物館実習

２年目となる 2019年度博物館実習も、学院志研究室の所蔵資料を用いて将軍山会館の展示ケースを１つ完成させるという内容であった。ただし前年度の反省を踏まえ、春学期の授業時間をすべて展示の準備に充てていただけることとなった。実習生は７名で、４月22日（月）に将軍山会館の見学、翌週の29日（月・祝）に学院志研究室資料室の見学を行ない、あらかじめピックアップした資料を紹介した。このとき紹介した資料を参考に各自が展示企画案をつくり、翌週の５月６日（月・祝）にプレゼンテーションが行なわれた。

企画案は、①入学・卒業記念品、②将軍山祭、③大阪

府北部地震、④学部学科の変遷の４種類にわかれた。①は入学式、学位授与式の節目に、教育後援会（大学の保護者会）や大学校友会から贈られた記念品を展示するもの。学院志研究室の資料室には大学一期生から寄贈された卒業記念品が残る。開学時から現在までの入学式、学位授与式の写真を合わせて展示し、在学生には親しみを、卒業生には懐かしく感じてもらい、資料の寄贈につなげる機会をつくるという企画であった。

②はいわゆる大学祭の展示である。資料室には第１回目から昨年度までの学祭のパンフレットや写真が所蔵されており、それらを学生の目線で展示することで、今年の将軍山祭の参加をうながすというものである。

③は前年に発生した大阪府北部地震の被災資料や写真パネルを展示する企画。学院志研究室では地震発生の翌日から被災資料の収集を開始し、記録集[3]の発行も行なった。自らが経験した災害であるだけに、もっとも身近に感じられるテーマであった。

④は本学の学部・学科の変遷をたどりながら、どんな学びが展開されてきたのか、年間スケジュールや卒業論文のテーマを紹介する展示。所属する学部・学科のことはある程度知っているが、他の学部・学科のことはよく知らないことが企画の契機であった。

報道機関各位

学校法人 追手門学院

プレスリリース　No.28
2019年9月27日配信

〒567-0008 大阪府茨木市西安威2-1-15　URL: http://www.otemon.ac.jp/

2018年大阪府北部地震の被害を振り返り教訓に
博物館実習生による大阪府北部地震展

2018年6月18日7時58分頃に発生した大阪府北部地震で激しい揺れに見舞われた追手門学院大学(大阪府茨木市、学長：川原俊明)の被害から、今後の災害の備えについて考えてもらおうという展示会「災害から身を守れ」を学生が企画し、大学内で開催しています。

この展示会は学芸員の資格取得を目指し「博物館実習」の科目を履修している学生7人が企画しました。

会場の茨木安威キャンパスにある将軍山会館2階の展示スペースには、地震発生時刻を示したまま壊れた掛け時計や倒れた本棚で破損した厚さ1センチの壁面ガラスなど7点を展示しています。

企画・展示を行った学生たち

学生達は展示物ごとに当時の状況を解説したキャプションを作成した他、被害を受けた学生に聞き取り調査をした結果をまとめたパネルも作成し、揺れに備えて日ごろから家具を固定しておくことや、災害時に役に立つ防災グッズの準備を呼びかけています。

地震発生時刻の7時58分で止まった時計

地震当日、追手門学院大学は震度6弱の激しい揺れに見舞われました。校舎が倒壊するといった被害はありませんでしたが、書架を設置している教員個人の研究室や図書館で被害が目立ちました。

展示を企画した女子学生の一人は「この展示をみて多くの人が地震について今一度考え、そして命を守るための行動へのきっかけとなって貰えたら嬉しいです」と話しています。

この展示会「災害から身を守れ」は2020年1月17日（金）まで開催し、入場無料でどなたでも見学いただけます。

【ポイント】
○2018年6月18日の大阪府北部地震を振り返る企画展
○企画・展示をしたのは、学芸員の資格取得を目指し「博物館実習」を履修する学生7人
○地震で壊れた掛け時計やガラスなど7点を展示

【開催概要】
現在開催中～2020年1月17日（金）まで　（土日祝は休館）
会　　場：追手門学院大学茨木安威キャンパス（大阪府茨木市西安威２－１－５）
開館時間：平日9時～17時（入館は16時30分まで）

この資料の配付先：大阪科学大学記者クラブ、北摂記者クラブ等

【発行元】　追手門学院 広報課　TEL：072-641-9590　谷ノ内・足立

以上の企画案プレゼンの結果、合議によって③大阪府北部地震をテーマに展示することが決まった。ただし、来館者のなかには大きな被害にあい、いまだ精神的苦痛を感じる場合も想定される。そのため被害の大きさや災害の恐ろしさに焦点をあてるものではなく、将来の災害への備えを考えるきっかけとなるような展示を目指すこととなった。例えば、写真パネルで大学構内の被災状況を掲示するだけでなく、その連続性のなかで復旧作業の様子と現在の姿とを合わせて並べることで、被災者に配慮する工夫を施すなど、展示企画案が実習生同士の話し合いで次第にブラシュアップされていった。

その後、５月27日（月）に資料室において展示する被災資料の選定が行なわれた。約１ヶ月前に資料紹介して以来の来室である。翌週の６月３日（月）には展示物の測定が行なわれ、瀧端先生・宮元正博先生（池田市立歴史民俗資料館学芸員）指導のもと、キャプション作成の準備が着々とすすめられた。

将軍山会館で本格的な展示実習が始まったのは、春学期も終わった８月９日（金）からである。翌10日（土）にかけて両日10時から16時まで集中講義の形式で行なわれた。このころになるとキャプション、パネル、チラシ・ポスターの作成は最終段階に入っていた。

この年に博物館実習で使用した展示ケースは幅248㎝×高さ50㎝×奥行47㎝とやや大きく、両側にガラスがはめられた難易度の高いものであったが、特性を上手く利用した左右どちらから観ても違和感をもたない展示が完成した[4]。

2019年度博物館実習展示「災害から身を守れ～あなたの部屋は大丈夫？追手門の被害から考えよう～」は学内で反響を呼んだほか、広報課から記者クラブへ報道発表されたこともあって新聞社からの問い合わせを受けた（左のプレスリリース№28を参照）。大阪府北部地震は大学の歴史となるまで相当の年月を要するが、被災資料と同じく人々の記憶からも刻々と失われてゆく性質をもつため、被災者である学生自身の手によって成されたことに一定の意味があったと考える。いつか大阪府北部地震を本学の歴史として語るとき、本展示が将来の自校教育の一助となるだろう。

４．2020年度の博物館実習

今年度の博物館実習は新型コロナウイルスの爆発的な感染拡大により、春学期はすべてオンライン授業を余儀なくされた。そのため学院志研究室で資料を紹介することも、将軍山会館を見学することもできず、６名の実習生と会うことがないまま、夏期集中期間を迎えることとなった。

本学の方針で夏期集中講義は実習系のみ対面授業が許されたため、８月24日（月）から28日（金）までの５日間にわたって将軍山会館で博物館実習を行なうことができた。

初日はNPO法人フィールドの堀内保彦氏を迎えて写真撮影の実習が行なわれた。この写真撮影実習において、学院志研究室資料室が所蔵する関原六資料群を撮影媒体として提供した[5]。

関原六（1889-1945[6]）は、第10代第４師団長や初代第44師団長などを歴任した陸軍中将である。追手門学院の前身にあたる大阪偕行社附属小学校は、のちに第４師団となる大阪鎮台にあった親睦団体「大阪偕行社」のなかに創設された。創設者の高島鞆之助は大阪鎮台司令官ののち初代第４師団長を務めている。こうした縁から2020年７月20日（月）、関原六の遺品を一括して寄贈いただくことができた。勲一等瑞宝章をはじめとした勲章、古写真、書簡など、ひとりの軍人の人生をほぼ網羅した資料群が一括して残されている点で極めて貴重といえる。

寄贈資料の整理・調査には未着手であったが、早々に博物館実習で活用することを決めた。それは教育の場で活用して欲しいという寄贈者からの強い希望があったためである。新型コロナウイルスによってモノに触れる機会のなかった実習生の心をつかむのに充分な資料であった。

２日目から本格的な展示実習がスタートした。瀧端先生・宮元先生主導のオンライン授業において、将軍山会館で展示する企画案が話し合われ、感染症をテーマとする展示を行なうことが決まっていた。不要不急の外出を控えなければならないさなか、各自が資料の収集や自作に努め、展示物はある程度あつまっていた。

この年に使用した展示ケースは幅250㎝×高さ66㎝×奥行33㎝のもので、壁面がマグネットボードになっていた。もちろん実習生が展示ケースを実見するのはこのときが初めてである。そのため展示のイメージがわかず、キャプションやパネルのブラシュアップに３日半かかった。

最終日にはなんとか展示が完成した。実習生からは「（オンラインという）慣れない授業の中では、実習生同士の話し合いが難しかった。また完成イメージが湧かなかったため、この調子で展示を完成させられるのかという不安が大きかった。……最終日には、皆が積極的に動き、納得いく展示が完成し、達成感を得ることができた。」、「私はリモート授業が苦手だったので、展示実習までにいろいろ決まるのか不安だった。……途中難航した部分もあったが先生方の手助けもあり、メンバー同士協力し合いそれぞれの役割をしっかり持って完成させることができた。完成した展示ケース内は予想以上に良くできており、多くの人に見てもらいたいと強く思った。」、「オンライン上で展示内容について話し合うのは難しく、なかなか進めることができなかった。……当日は、キャプション決めに苦戦したが、その後は、分担作業でスムーズに進め、何とか最終日までに終えることができた。また、実際に展示を行うことは、想像以上に大変だった。だが、同時に、完成した展示ケースを見て、達成感も感じた。」といった体験記が寄せられ[7]、コロナ禍ならではの苦労と達成感とがあったようである。

写真＝2020年度博物館実習展示（将軍山会館）

以上のように、2020年度博物館実習展示は本学の歴史というよりも、学生にとって身近な時事問題をとりあげる形となった。コロナ禍における本学の支援策としては、大学校友会から全学院生・教職員に贈られたマスクとマスクケースとを実物展示し、紹介している。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックをきっかけに、オンライン授業がニューノーマルになるなど、教育現場は大きく変わろうとしている。実技指導を伴う博物館実習がそれにどう適応してゆけばよいか、模索は続く。

おわりに

本稿では2018年度から2020年度の３年間にかけて学院志研究室で受け入れた博物館実習の内容をまとめた。学院志研究室は学院の歴史や学院関係者の事績を調査し、ゆかりの資料を収集・整理・保管するとともに、年志編纂や自校教育の場へ還元することを使命としている。そのためこの３年間は博物館実習を通した自校教育を試行してきた。

自校教育とは、建学の精神や歴史、創設者や卒業生の功績など、自校と社会とのかかわりや位置づけを学び、自校の特性と現状を理解する教育のことである。1990年代後半から各大学で取り組みが本格化し、その成果の大きさから2008年には中央教育審議会の答申のなかに、大学に期待される取り組みの一つとして重要性が説かれた。博物館実習の展示実習の場となった将軍山会館はこうした社会動向を反映して竣工した施設である。

ただし、大学における自校教育の正課科目化は遅く、2013年度に共通科目（現在の基盤教育科目）の総合科目「学び論A」が開講、2015年度春学期からは「追手門UI論」と名称を改め今に至る。「追手門UI論」は学院の今と昔についてオムニバス形式で能動的な授業が展開され、全員履修科目に近い扱いで開講されている[8]。博物館実習は実技指導がメインになるためいわゆる自校教育科目とは一線を画すが、学院の歴史的資料に触れる機会の創出という点で自校教育を取りこむ工夫をしてきた。他大学における事例を踏まえても、自校教育は基礎教育やキャリア教育などの他教育との関連が深く、一概にひとつのカテゴリーに限定できないことは自明である[9]。ゆえに博物館実習のなかに自校教育を取りこむことが可能であると考える。今後も課題は多いが、本学の特色を生かした博物館実習となるよう努めていきたい。

【引用文献・参考資料】

(1) 小倉久美子「私立大学の組織改編下における学校資料の収集整理―追手門学院大学記念資料室から学院志研究室資料室へ―」（『一貫連携教育研究所紀要』第5号、2019年3月）。追手門学院大学機関リポジトリ http://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000145OTEMON_506190302

(2) 2018年度博物館実習の体験記は「学院志研究室 News Letter」第8号（2018年10月22日発行）に掲載。学院志研究室ホームページ（https://www.otemon.ac.jp/research/labo/gakuinshi.html）でダウンロードが可能。

(3) 学院志研究室編『大阪府北部地震の記録』（追手門学院大学、2018年3月31日発行）。

(4) 2019年度博物館実習の体験記は「学院志研究室 News Letter」第11号（2019年10月21日発行）に掲載。

(5) 2018年度の写真撮影実習においても、戦前の小学校の教科書や大学開学時の学生歌の楽譜など、学院志研究室が所蔵する資料の提供を行なった。

(6) フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』に立項される「関原六」（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%96%A2%E5%8E%9F%E5%85%AD）は、没年を「1944年〈昭和19年〉4月13日」とするが誤りである。学院志研究室が寄贈を受けた関原六資料群のなかには死亡診断書が含まれており、それによれば1945（昭和20）年4月12日午前2時38分に大阪陸軍病院大阪赤十字病院で死亡しており、死因は戦病死（病名は胃潰瘍）とある。遺族からは「大阪大空襲を病室の窓から見ていた」という証言を得ており、蓋然性が高い。

(7) 2020年度博物館実習の体験記は「学院志研究室 News Letter」第13号（2021年1月6日発行）に掲載。

(8) 自校教育については『追手門学院130年志　改革の10年　2008-2018』（追手門学院、2020年3月）の「EPISODE09 改革の連携」に詳しい。

(9) 不破克憲「大学における自校教育の様態に関する一考察」（『大学アドミニストレーション研究』第10号、2020年3月）。